

江戸蕎麦ものがたり

## 藪忠物語

～ 藪<sup>たんに</sup>異ノ抄 ～

江戸ソバリエ協会 理事長  
ほしひかる

ある日のこと、驚くようなメールを頂きました。

メールの主は、大正から昭和の初めにかけて「蕎麦打ち名人」といわれた人の孫に当たる方でした。

そのお孫さんは、ネットで私のことを知り、「祖父のことを知っておられたら、教えてほしい」ということでした。お孫さんの名前は**村瀬栄一**さん、そして祖父という人は、かつての蕎麦打ち名人**村瀬忠太郎**のことでした。

栄一さんの祖父にあたる**村瀬忠太郎**(安政6年～昭和13年6月27日)は、滝野川町中里に在りました「**日月庵 やぶ忠**」の店主でしたが、彼の名人技を見出したのは、**高岸拓川**(明治元年～昭和38年)という文士でした。

忠太郎と拓川が出会ったのは、昭和4年の春ごろと思われます。忠太郎は顎髭が長い70歳の蕎麦打ち名人、拓川は鼻が高く威厳のある風貌をした61歳の文士でした。

拓川は当時、浅草の「**萬盛庵**」で「奥山会」という文士による蕎麦会を開いていましたが、「萬盛庵」に不幸が起きたため、代わりを探していたところでした。

拓川は、どういう縁だったのか不明ながらも村瀬忠太郎を知ることとなり、以後中里の「**日月庵 やぶ忠**」で蕎麦会を行うようになっていたのです。

拓川は、その会の顧問格であり、主催は「校正の神様」と呼ばれていた神代種亮(明治16年～昭和10年)、他に食道楽社の松崎天民(明治10年～昭和9年)や磯ヶ谷紫紅(?)が協力していました。作家の獅子文六や蕎麦研究家の植原路郎や新島繁らによりますと、「**日月庵 やぶ忠**」における蕎麦会は、店の二階八畳で開かれていたそうです。御献立は、鮎とお酒と《せいろ》などだったそうです。

集まった文士は、石井研堂、幸田露伴、上田万年、久保田万太郎、豊島与志雄、佐藤春夫、獅子文六らでした。

中里というのは今の駒込付近です。平成 27 年夏、私たちは JR 駒込駅で待合わせて、まず中里 199 番地に在った「日月庵 やぶ忠」跡に行きました。

歴史を探ることが嫌いでない私は、幻の「日月庵 やぶ忠」の跡地を推定していましたから、すぐにご案内できました。

栄一さんにお会いしてお話をうかがいますと、村瀬忠太郎・はる夫婦には子供がなかったそうです。そこで養子をもって「日月庵 やぶ忠」を継がせることにしました。その養子が**村瀬忠一郎**です。忠一郎・つる夫婦には女子が生まれ、その子は長じて札幌の蕎麦屋「まるきへ」へ嫁ぎました。現在の「まるき」は他の人が引き継いでいますが、今も「明治 22 年創業の老舗」として存続しています。

この後、駒込駅近くで蕎麦関係の商社を経営されているイナサワ商店の会長にも加わってもらいました。

会長はお知合いの H さんを紹介してくれました。H さんは 80 歳、この地で生まれ、今もこの地に住まわれている方です。H さんは、当時の「日月庵 やぶ忠」を覚えておられました。看板代わりの籠行燈があつて、樹や植木に囲まれた店で、父親から「あそこはお金持だけが行く、高級蕎麦屋だ」と聞かされていたそうです。

しかしながら、戦災で池之端から飛鳥山までは焼野原となったため、残念ながら「日月庵 やぶ忠」も消失しました。さらに村瀬忠太郎には男子がいなかったから店は途絶えてしまった、というのがこれまでの話でした。

ところが、ここに村瀬栄一さんというお孫さんが登場したのですが、彼は「日月庵 やぶ忠」系とは異なる血筋だと言われるのです。栄一さんがお姉さんから聞いたところによりますと、店はもう一軒、西ヶ原にあったというのです。

どういふことでしょうか！

伺ってみますと、話はこうでした。村瀬忠太郎は養子を迎えたものの、一方では違う女性との間で女兒に恵まれました。忠太郎・はる夫婦はその児を引き取って育てます。名前は**村瀬春代**さん。長じて、近くの川魚料亭「**寿**」(中里 240 番地)で板前として働いていた**原一二**を養子に迎え、「寿」の数軒先の西ヶ原 100 番地に**蕎麦屋「藪忠」**を持たせたのです。

村瀬栄一さんに当時の写真を見せてもらいますと、中里の店はひらがなで「やぶ忠」、西ヶ原は漢字で「藪忠」とありました。私は資料に「やぶ忠」「藪忠」という二つの店名が出てくるのを不思議に思っていたのですが、これで謎が解けました。

さて、この村瀬一二・春代夫婦には一女三男が生まれましたが、戦争になって父一二さんが招集されたため、一家は西ヶ原の店を閉じて一二さんの故郷新城へ疎開しました。終戦になって戦地硫黄島から戻ってこられた一二さんは四

男栄一さんをもうけ、45歳で亡くなられたそうです。大正元年生まれの母春代さんの方は92歳の長寿を全うされたというのが、栄一さんの話でした。

そのことをHさんに話すと、「それなら、すぐそこです」と言って、「寿」跡と、もう一軒の「藪忠」跡に、案内してくれました。

こうして、私の長い間の謎は、村瀬忠一郎の「やぶ忠」(中里)と村瀬一二の「藪忠」(西ヶ原)の二軒が在ったということで、解決したのです。

その後、私たちは近くの喫茶店で一休みしましたが、栄一さんの母上は「お前は、祖父の忠太郎にそっくりだ」とおっしゃっていたそうです。そうだとすれば、目の前に座っておられる栄一さんに髭を付ければ、まさに村瀬忠太郎になるのでしょうか。

ところで、明治から戦後の蕎麦業界は、機械麺が幅を利かせていましたが、それを歎く人たちによって「手打ち蕎麦」回帰の芽が出ようとしていました。

その旗手の一つが昭和28年に長谷川清峰らが立ち上げた老舗蕎麦屋の「蕎風会」、もう一つが昭和48年に片倉康雄(「一茶庵」創業者)と多田鐵太郎が設立した「日本そば大学講座」でした。後者の片倉の手打ち蕎麦は、拓川に「忠太郎の蕎麦を見てこい」と言われたことから始まったのでした。

村瀬忠太郎は「蕎麦はなぜ江戸の昔に還らぬか」と歎いていたといいますが、おそらく長谷川清峰もそうだったでしょう。この二人の歎異ノ抄を感じ取った「蕎風会」と「一茶庵」の片倉によって、日本の蕎麦界は牽引され、手打ち蕎麦が主流となっていきました。

その松明を持って最初に道を照らした忠太郎は婿である村瀬一二の故郷新城市の前山墓地に、拓川は足立区の薬王院に眠っています。

「蕎聖」とよばれた片倉康雄の弟子である方が、「迷ったときは、拓川の墓にお参りする」とおっしゃいました。



〔高岸拓川の墓〕

また、かつて私は、**片倉康雄**のお孫さんである**片倉英統**先生が『ライフスタイルとしての蕎麦屋』を上梓されたとき、序に「品性を建つるにあり」という拙文を書かせていただいたご縁があります。

そして今日はここに**村瀬忠太郎**のお孫さんの**栄一様**とお会いするご縁をいただきました。その栄一さんは「この度、祖父のことを知り、自分の家系にも誇りをもてた」と喜んでおられました。それ以上に私も片倉英統先生・村瀬栄一様の二重のご縁に恵まれてお役に立てて何より嬉しく思いました。

《参考》

村瀬忠太郎『蕎麦通』(小学館文庫)

高岸拓川『蕎麦経饅頭経』

沢村貞子『萬盛庵物語』(新潮文庫)

獅子文六『食味歳時記』(文春文庫)

岩崎信也『蕎麦と生きる』(柴田書店)

**片倉英統**『ライフスタイルとしての蕎麦屋』(幹書房)

※現在の住居表示ですと現在住んでる方に迷惑がかかりますので、旧番地に変更して記述しました。

※『蕎麦春秋』vol. 36 掲載の「日月庵やぶ忠物語」に加筆し、掲載しました。